

牛群検定通信 No100

～暑い夏を乗り切ろう 2～

「これまでにない災害クラスの猛暑」と連日報道されています。暑熱対策は万全でしょうか？今回は、ちょっと見落としがちな暑熱対策のポイントを紹介します。暑熱対策を再点検してください。

1 牛群検定気象情報（カウダス）

繁殖台帳Webシステムを用いると、ご自分の牧場の毎日の気象を確認できます。検定日のみならず、今日までの気象が表示されます。ご確認ください。

2 暑熱対策の基本

- ①十分な飲水
- ②送風（夏日は24時間運転）
- ③重曹、ミネラル、ビタミンの給与
- ④良質粗飼料（急変はNG）の給与
- ⑤遮光、屋根遮熱対策など施設改善

3 乾乳牛

乾乳牛への暑熱対策を施していますか？乾乳牛は次産において生産の主力となる大切な牛です。妊娠後期を超えた乾乳牛は体が重く、暑熱には弱いものです。また給与飼料も粗飼料主体となるため、更に暑熱には弱くなっています。乾乳牛にも送風等の暑熱対策が必要です。乾乳牛に暑熱対策を講じた場合、講じなかった乾乳牛と比較して、分娩後の乳量が約5kg増加したという報告もあります。妊娠後期の未經産牛も同様です。

4 子 牛

子牛にも暑熱対策が必要です。送風、換気は暑熱対策のみならず、ホコリやアンモニアといった呼吸器病対策の意味でも必要です。子牛は脱水症になりやすく、初乳期を除いては十分な飲水が出来るようにしてください。もし、子牛が何らかの原因（汚れ、給水管のつまり等）で十分に飲水出来ていない時は、注意が必要です。のどが渴いただろうと、大量の水を一度に与える（※）と、水中毒という病気なる可能性があり、最悪のときは肺水腫を起こし死亡することもあります。このような時は少量ずつ何回にもわけて、時間をかけて水を与えてください。

（※）体重の約8%、例えば体重50kgなら4リットル以上は危険

5 弱った牛

当然ですが、暑熱により熱射病となる牛は弱った牛に多く発生します。分娩直後（特に難産）の牛をはじめ、乳房炎や低カルなどが潜在化している牛も要注意です。また、暑熱から粗飼料の食い込みが悪いと、ルーメンアシドーシスやケトーシス、第四胃変位なども引き起こすなど、ますます暑熱に弱くなり熱射病になりやすくなります。このような病気の予防対策は、オールシーズンで行っていると思いますが、暑熱下ではとりわけ予防に努めてください。